

●優秀賞

学習レポートと3つの場で作る「つながる国語科」

福島県新地町立福田小学校 たかはしなおゆき
高橋尚幸



研究の概要

本稿は、「被災地の僻地校に勤務する教師には、復興を支える人材を育てる責任があるのだ」という信念のもと、国語科を中心として、児童の思考力・判断力・表現力を育成することを目指した取り組みに関する実践記録である。

①習得・②活用・③共有の3つの場を設定することで、国語科の学習が他の教科における言語活動の充実につながり、思考力・判断力・表現力の向上につながると考え、実践を行った。

小学校6年生21名が、4月から9月までの間に、無理なく、楽しみながら、平均100枚ほどの学習レポートを書くことができた。児童は、

毎日のように繰り返し学習レポートを書く中で、自分の考えや分かったことを文章に書き表す力だけではなく、資料を調べる力、図や表を用いて説明する力、友達に問う力などを伸ばすことができた。

I はじめに

本校は、全校児童数105名、山と海に挟まれた小さな僻地校であり、東日本大震災で学区の約4割が津波にのまれた被災地でもある。幸いにして命を落とした児童はいなかったものの、地域全体が甚大な被害を受けた。現在でも学区内に仮設住宅が建ち並び、多くの児童がそこから通学している。私は、震災以降、被災地に生



きる教師として、「自分に何ができるだろうか」と自問する日々がずっと続いている。

私が現時点で出した結論は「教師がすべきことは子どもたちに学力をつけることだ」というものである。被災地の復興には、まだ数年・数十年かかるだろう。そして、今後求められるのは元の姿に戻すことではなく、新しい町を創っていくことである。そのためには、復興を担う人材を育てなくてはならない。被災地だからこそ児童に「確かな学力」と「思考力・判断力・表現力」を育成する責任が教師にはあるのだと、強く感じている。

II 主題設定の理由

私は、確かな学力と思考力・判断力・表現力を育成していくためには、全教科において学習の基盤となる言語活動の充実を図っていく必要があると考えた。『言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】』（H23 文部科学省）では「各教科等においては、国語科で培った能力を基本にそれぞれの教科等の目標を実現する手立てとして、知的活動（論理や思考）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤といった言語の役割を踏まえて、言語活動を充実させる必要がある」と述べられている。つまり、国語科の学習を他教科へとつなげていくことが求められているのである。しかし、先行実践を見ると、国語科の実践としては非常に優れているものでも、他教科でどのように生かすのかまでは述べられていなかったり、国語科と他教科や総合的な学習の時間を連携させてはいるが、単発の実践であったりするものが多いと感じた。同様に、自分の実践を振り返っても、国語科の学習と他教科とのつながりが不明瞭な場合や、他教科との関連を図っても年に1・2回しか場を設定できないことが多かった。国語科の学習が他教科につながっていないのである。

私はこれらの反省から、国語科の学習と他教科の学習を日常的につなげたいと考え、昨年度から、国語科で学んだ書き方を使って他教科に

おいて学習レポートを書く、という活動に取り組ませている。昨年度は、繰り返し書いていくことによって子どもたちが主体的に学ぶ姿が増えていくことが分かった。今年度は、昨年度の反省をもとに、国語科と他教科の言語活動をより強くよりシームレスにつなぎ合わせるための場を設定することによって、児童の思考力・判断力・表現力を伸ばす取り組みを行いたいと考えた。

III 研究の視点

本実践は、小学校6学年における今年度の4月から9月までの取り組みである。

次の3つの場を設定することで、国語科の学習と他教科の言語活動につながりが生まれ、児童の思考力・判断力・表現力を高めることができると考えた。

〈第1の場：書き方を習得する場〉

国語科でしっかりと基礎・基本を学ばなければ、他教科で生かすことはできない。他教科で活用するためには、国語科の中で基礎・基本を習得する場が不可欠である。この時、国語科で学んだ基礎・基本を、いつ、どの教科で、どのように生かすのかを明らかにしながら、学習計画を立てるようにした。

〈第2の場：学んだ書き方を活用する場〉

第2の場として、「国語科以外の教科で学習レポートを書く場」を設定することが、本実践の特徴である。社会科や算数科でも日常的に学習レポートを書くことで、国語科で学んだ様々な基礎・基本を活用できると考えた。また、自

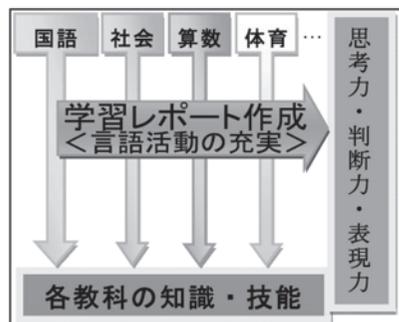


図1 各教科を貫く言語活動

分の意見や理解したことを説明するためには、しっかりと調べたり、友達と意見交換をしたりする必要がある。つまり、「学んだ書き方を活用する」とは、学習レポートを書く行為だけを指すのではなく、取材活動や構成を考えることなど、書くために行う活動全般を指す。そのような活動を行う場を日常的に設定することによって、思考力・判断力を向上させることができると考えた。

〈第3の場：よりよい書き方を共有する場〉

昨年度の実践から、学習レポートを書く活動を開始した当初に児童が抱く「自分には難しそう」という不安を乗り越え、どんどん自信が深まることが分かった。そこで、書くことに苦手意識のある児童に対する支援をていねいに行いたいと考えた。また同時に、書くことが得意な児童には、早く自信を深め、学級全体をリードする存在になって欲しいと考えた。そこで、児童の意欲を高めたり、友達のよいところをまねて参考にしたりすることができるように、お互いに学習レポートを読み合い、それぞれのよさを共有する場を設定することとした。

〈時間の確保について〉

3つの場を設定するためには、そのための時間をどうやって確保するかが問題となる。時間の確保のためにどのような工夫が有効かも検証していきたいと考えた。

IV 実践の実際

1 4月・5月の取り組み

4月・5月には、表1のような計画で実践を行った。

(1) 第1の場：書き方を習得する場

自分の意見を書き表す上で最も基本となることは「構成」であると考えた。そこで、教科書の説明文において頻繁に使われている「話題提示・本論1・本論2・結論（はじめ・中1・中2・終わり）」の尾括型の構成を、教材文「イースター島にはなぜ森林がないのか」を使って学習した。その後、「学校のよさを宣伝しよう」において、問いを用いた話題提示や、結論のまとめ方について学習した。

表1 4・5月の指導計画

時期	教科・単元	主な学習活動・内容（時数）
4/15 ～ 4/30	国語科〔自分の考えを明確にしながらかくもう〕	第1の場：習得する場 ・事実と意見の区別を知る。(1) ・尾括型の構成がどんなものかを知る。(1)
4/15 ～ 4/24	社会科〔縄文のむらから古墳のくにへ〕算数科〔円の面積〕	第2の場：活用する場 ・調べて分かったことと自分の考えを区別して、縄文時代についての学習レポートを書く。(5) ・尾括型の形式で、円の面積の求め方を順序よく説明する学習レポートを書く。(6)
	朝の活動	第3の場：共有する場 ・友達の作品を読み、よいところを自分の学習レポートに取り入れる。
5/13 ～ 5/17	国語科〔学校のよさを宣伝しよう〕	第1の場：習得する場 ・話題提示とまとめの役割について、確認する。(1) ・「キャッチフレーズ」を用いて「結論」を述べる方法を知る。(1)
5/1 ～	算数科〔分数のかけ算〕社会科〔天皇中心のくにづくり〕等	第2の場：活用する場 ・今まで学習したことを自由に生かしながら、学習レポートを書く。(7) 第3の場：共有する場 ・友達の作品を読み、よいところを自分の学習レポートに取り入れる。(2)

表2 4・5月の算数・社会科の流れ

導入	・学習課題を知り、学習の見通しを立てる。	5分程度
展開	・予習してきたことについて、グループや全体で話し合う。	25分程度
終末	・学習レポートを書く。	15分程度

(2) 第2の場：学んだ書き方を活用する場

児童が年間を通して学習レポート作成に取り組めるようにするには、「当たり前のように書く」学級文化を生成したいと考えた。学習導入当初だからこそ、集中的に書く時間を設けることにした。4月中旬からの2週間は、算数科と社会科を表2のような流れで実施し、毎時間学習レポート作成に取り組ませた。

最初の10日間でA4の用紙15枚の学習レポートを書いた。初日はどの子も「15分間で作文を一つ書くなんて無理です」と言っていたが、3日間で5枚のレポートを書いたあたりから「たくさんのことを調べたり、友達と話し合ったりすれば、書ける」と感じる子どもが増えていった。

これは、最初の予想どおり「はじめ・中・終わり」の構成が理解できるようになったことが大きかった。はじめの部分で話題提示としてどんなことを書けばよいかを1回で理解できる児

童は半数もいなかったが、繰り返し書く中で、問いの書き方を理解できるようになると、すらすらと書き始めることができた。また、結論の書き方も同様に、繰り返し書く中でだんだんと、理解できる児童が増えてきた。

(3) 第3の場：よりよい書き方を共有する場

本校で設定している15分間の朝学習の時間に、友達のレポートの中で参考になった点や助言を付箋紙に書き込み、それを添付する活動を行った。児童が大量のレポートを書くことができたのはこの「共有する場」があったからであろう。児童は、友達のレポートを読むことで、書き方や書く内容を理解し、意欲も書く量も表現の多彩さも、短時間で飛躍的に向上させることができた。

(4) 全体を通して

写真3のレポートは、3週間経過時に児童たちが書いたものである。8割程度の児童がこれくらいの分量を書けるようになった。「書く学級文化を作る」というねらいどおり、よい実践のスタートを切ることができたと言える。

この時期には、「はじめでは、学習したことの概要を説明する。中では、説明したいことを

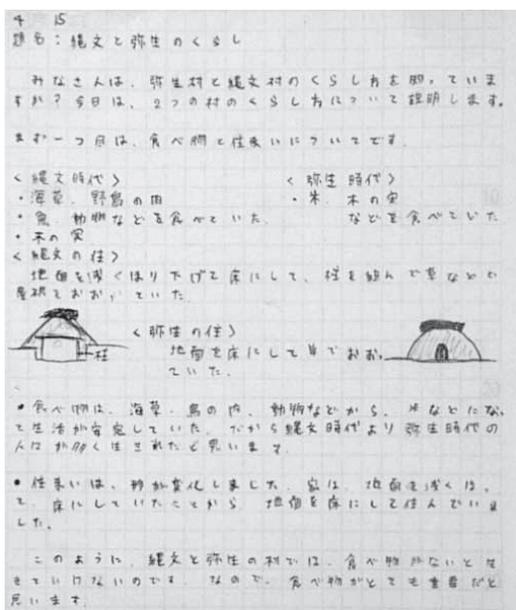


写真1 児童が初日に書いた学習レポート



写真2 レポートの読み合い

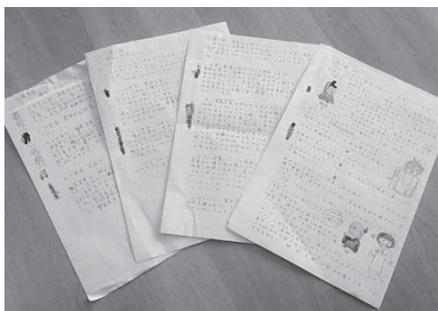


写真3 5月に書かれたレポート

詳しく述べる。終わりは、特に大切なことを短くまとめる」という指導を繰り返してきた。それによって、児童は、自分の考えを説明することとはどういうことかを理解することができ、思考と表現の力を少しずつ伸ばすことができたようである。

2 6月・7月の取り組み

6月・7月には、表3のような計画で実践を行った。

(1) 第1の場：書き方を習得する場

東京書籍版国語の教科書では、各領域の学習の関連性を考えた単元構成がなされている。例えば、「書き手のくふうを考えながら新聞の投書を読もう」で学習した構成の工夫を生かして、次の「わたしの意見」を書こう」の学習を行うようになっているのである。そこで、この2つの単元において、取材した内容を取捨選択し、自分の考えを示すために必要な情報を具体例や根拠として挙げながら文章を書くことを学習した。

(2) 第2の場：学んだ書き方を活用する場

今までは1時間の中で1枚のレポートを書いていたが、取材した内容を取捨選択しながら書く活動を行うために2～3時間分の学習内容を1枚のレポートにまとめるようにした。児童は調べた内容を整理し、必要なものは何かを判断しなくてはならない。

そのため、児童は、複数の情報を比較するた

表3 6・7月の指導計画

時期	教科・単元	主な学習活動・内容（時数）
6/17 } 6/26	国語科〔書き手のくふうを考えながら新聞の投書を読もう〕	第1の場：習得する場 ・自分の意見を分かりやすく説明するためには、どんな理由や根拠を挙げればよいのかを知る。(1) ・新聞の投書がどのような構成になっているのかを調べる。(3)
6/27 } 6/28	国語科〔「わたしの意見」を書こう〕	第1の場：習得する場 ・取材した内容をもとに、書く事柄を整理する。(1) ・具体例や根拠となる事実を挙げながら構成を工夫して意見文を書く。(3)
	朝の活動	第3の場：共有する場 ・友達の作品を読み、よいところを自分の学習レポートに取り入れる。
6/18 } 7/18	社会科〔武士の世の中へ〕～〔戦国の世から江戸の世へ〕	第2の場：活用する場 ・単元のねらいに沿って、学習したことを整理し、構成を工夫しながら、学習レポートを書く。(8)
	朝の活動	第3の場：共有する場 ・友達の作品を読み、よいところを自分の学習レポートに取り入れる。
6/18 } 7/19	算数科〔対称な形〕〔比と比の値〕	第2の場：活用する場 ・単元のねらいに沿って、学習したことを整理し、構成を工夫しながら、学習レポートを書く。(8)
6/14	体育科〔病気の予防〕	第2の場：活用する場 ・テーマに沿って、調べた内容を取捨選択しながら、学習レポートを書く。(1)



写真4・5 調べ学習に取り組む児童

めに、教科書だけではなく、資料集や書籍、国語辞典など様々な資料を検討しながら調べるようになった。また、自分の考えが妥当かどうかを判断するために、友達との意見交換が活発になった。

調べ学習や話し合い活動が充実すると、児童はますます意欲的に学習レポート作成に取り組むようになった。写真6は、「書くことが苦手だ」と自己評価している児童が、7月の算数〔対称な形〕(6時間)の単元で書いた学習レポートである。4月当初は2～3行程度しか書けなかった児童が、200字～400字程度は書けるようになってきた。書くことに慣れてきただけではな

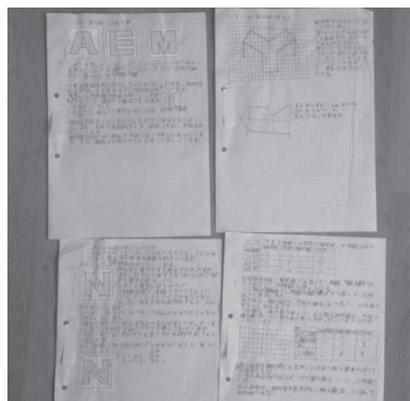


写真6 7月に書かれた学習レポート

く、しっかりと考えながら学習できている成果であろう。

(3) 第3の場：よりよい書き方を共有する場

児童が書くことに慣れてきたため、読み合う時間を少なくした。すると、児童から「もっとお互いのレポートを読む時間が欲しい」という要望がでた。児童にとっては、友達のレポートを読む場が非常に大切であることを再認識し、共有の場を増やすこととした。

(4) 全体を通して

学習レポート作成開始から3か月がたち、表現することへの苦手意識がどんどん減っていることが見てとれた。「とにかくたくさん書こう」という時期を過ぎ、「大切なことを選んで、自分の伝えたいことが伝わるように書こう」という態度へと変容した児童が多い。

そのため、児童の話し合いの内容にも変化があった。以前は「この問題はどう解くのか」や「この人物は何をしたのか」といった知識・理解のための話し合いが主であったのが、「Aの解き方とBの解き方では、どちらが分かりやすいか」「この時代で最も重要な出来事は何か」というように、問いの質が変化してきた。何が重要なのかを主体的に判断する力の高まりを感じた。

3 8月・9月の取り組み

8月・9月には、次ページの表4のような計画で実践を行った。

(1) 第1の場：書き方を習得する場

〔資料を活用して書こう〕の単元では、児童に身に付けさせるべき基礎・基本として「引用」が取り上げられている。「引用」は非常に難しい。そこで、単元の中で1枚の作文を書くだけではなく、できるだけ繰り返し書けるように次のように単元を組み立てた。

表4 8・9月の指導計画

時期	教科・単元	主な学習活動・内容（時数）
9/6 ～ 9/16	国語科 〔資料を活用して書こう〕	第1の場：習得する場 ・これから行う学習の概要を知り、学習計画を立てる。(1) ・教材文を読み、資料を活用するとはどういうことかを具体的に知る。(1) ・国語教科書の題材を使って、資料を活用して意見文を書く。(2)
		第3の場：共有する場 ・友達の意見文を読み、参考にしたいことを見つける。(1)
9/17 ～ 9/19	社会科〔明治の国づくりを進めた人々〕	第2の場：活用する場 ・黒船の来航、明治維新、文明開化などについて調べ、廃藩置県や四民平等などの諸改革を行い、欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めたことを理解する。(3)
9/19 ～ 9/28	国語科 〔資料を活用して書こう〕	第1の場：習得する場 ・国語科で学習した「資料を活用する方法」を使って、社会科の学習内容に関する学習レポートを書く。(1時間)※国語科の中で、社会科の学習レポートを書く。 ・前時の学習の反省を生かし、「資料を活用する方法」を使って、社会科の学習内容に関する学習レポートを書く。(1)※国語科の中で、社会科の学習レポートを書く。
9/28	社会科〔明治の国づくりを進めた人々〕 算数科〔速さ〕	第2の場：活用する場 ・今まで学習したことを自由に生かしながら、学習レポートを書く。(8)

- ① 国語科の教科書の題材を使って、引用の仕方を知る。
- ② 資料を引用しながら、社会科の学習に関する学習レポートを書く。
- ③ 前回の反省（資料を示す「○○によると」等の言葉を使えたか、自分が伝えたいことに適した資料を選択できたか等）を生かし、社会科に関する学習レポートを書く。

その結果、国語科の7時間の中で3本の作文（学習レポート）を書くことができた。1本目のレポートではうまく資料から引用することができなかった児童も、徐々に引用の仕方が分かってきたようで、資料を活用して書けるようになってきた。

(2) 第2の場：自由に活用する場

自然と資料を活用した書き方をする児童が多く見られたが、一方では自分の書きたい内容に

合わせて、資料を使ったり使わなかったりするといった使い分けをしている児童もいた。また、1学期に学習した「頭括型・尾括型・両括型」についてもう一度説明したところ、自分の書きたい内容に合わせて使い分ける児童もいたことから、既習事項を繰り返し指導することの大切さを再認識した。引用を使う書き方は、11月に学習する算数科〔資料の調べ方〕での学習レポートでもう一度取り上げることができるであろう。意図的・計画的に既習事項を生かせるようにしていきたい。

(3) 第3の場：よりよい書き方を共有する場

1学期の交流の時間は朝の活動の15分間が主であった。しかし、9月には40分間、児童が作文を読み合う時間をとった。その結果、たくさんの友達から多数の付箋紙をもらうことができるようになり、児童は自分では気付くことができなかつたよい点を見つけることができた。そ

れによって「〇〇がよく書けていることが分かったので、次は〇〇をがんばろう」というように具体的な改善点を発見できていた。

(4) 全体を通して

資料を使って書く活動によって「より詳しく意見を述べたり、分かったことを説明したりするにはどうすればよいか」と考える児童が増え、書くこと自体はもちろん、書くための準備として調べることや話し合うことの重要性を意識しながら学習するようになったようである。例えば、毎日書いている日記の中に「レポートがしっかり書けるかどうかは、やっぱり自分がどれだけ動いたかで決まるといことですね」と書いている児童がいた。「どれだけ動く」というのは、自分が主体的に思考したり判断したりしながら学ぶということである。レポートを書く活動と、思考・判断することのつながりを、児童自身が実感するようになってきた現れであると言える。

4 時間の確保について

3つの場を設定するためには、そのための活動時間を捻出する必要がある。そこで、家庭学習において予習を奨励することとした。予習をすることで、効率的な授業を行うことができ、それが時間を捻出することができるからである。例えば、予習で児童の中に生じた疑問点をもとに学習課題を設定したり、相違点について話し合わせたりすることで、導入の時間を減らすことができた。また、家庭である程度の調べ学習や解題は終わっているのので、「自力解決」の時間を減らすこともできた。しかし、予習中心の家庭学習には慣れていない児童が多い。そこで、次のような手立てをとった。

(1) 単元学習計画書の作成と配布

表1・3・4の月ごとの計画とは別に、各教科で単元ごとに詳細な「単元学習計画」を作成し、どの時間にどんな学習を行うのかを明記した。この計画書を児童に配布することで、単元

の見通しをもたせることができ、児童は予習を進めやすくなった。また教師にとっては、単元の中でレポートを書く時間がどれくらい確保できるかを把握することができ、授業が進めやすくなった。

表5 社会科の単元学習計画表

6時間	明治の国づくりを進めた人々	
黒船の来航、明治維新、文明開化などについて調べ、航海写真や西洋平等などの複製画を行い、欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めたことが分かる。		
1	江戸時代から明治時代になって、世の中はどのように変わりましたか。学校のことを中心に、資料を活用しながらレポートにまとめましょう。 P100 ☆江戸時代から明治時代になって子どもたちの暮らしはどのように変わりましたか。 1 子どもの遊ぶ向きについて 2 服装について 3 建物について	4 教科書について ☆教科書を変えるのにどんな苦労がありましたか。 ☆学校以外にも様々なことが変わりました。この変化を漢字4文字で何と言いますか。
2	明治維新がどのように進みましたか。また、どのような人々がどんな思いを持って進めましたか。資料を活用しながら、レポートにまとめましょう。 P102 P103 ☆明治維新は、どのように進んでいったのかを、「〇〇が、〇〇をした」の形でまとめましょう。 1 ベリーが、軍艦に乗って浦賀にきた。 2 幕府が、軍艦や大砲に驚いて、〇〇した。 3 幕府が、アメリカのどっ...	☆明治維新を進めた方中心人物3人について調べましょう。 ☆西郷隆盛と勝海舟は何を話し合ったのですか。 ☆江戸幕府の最後の将軍はだれですか。 ☆明治維新によって、どんな国を作ろうとしたのですか。
大久保利通は、欧米に学んで、どんな国を作ろうとしたのですか。そのために、ど		
4 その後の世の中にどんな影響を与えましたか。その後の世の中にどんな影響を与えましたか。その後の世の中にどんな影響を与えましたか。		
6	伊藤博文はどのような思いをもって、大日本帝国憲法を作りましたか。資料を活用しながら、まとめましょう。 P110 P111 ☆憲法が作られるまでの流れを、「〇〇が、〇〇をした」の形でまとめていきましょう。 1 板垣退助と大隈重信が、政変を作った。 2 様々な立場の人々が... 3 伊藤博文が、ドイツの...	☆憲法の中身をまとめましょう。 1 誰が中心の憲法ですか。 2 聖徳の治世とは？ 3 選挙のきまりは？ ☆この憲法から、伊藤博文がどんな国を作ろうとしていたのかを考えましょう。

(2) 手作り宿題の配布

前述の単元計画表だけでは、なかなか予習に取り組みない児童も多くいる。そこで毎日、教師の手書きの宿題を作成し配布した。手書きの宿題は、市販の教材とは違い授業の進度や児童の実態に合わせた内容にしたり、予習と復習にバランスよく取り組ませたりすることができた。また、予習をしていないと、次の日の授業に支障がでるため、家庭学習にしっかりと取り組む児童が増えた。



写真7 手作りによる宿題

(3) 全体を通して

本校は、「I はじめに」で述べたとおり、小規模僻地校である。塾に通っている児童の割合は、都市部と比較すると低い。それでも、単元の見直しをもつことができれば、しっかりと家庭学習において予習ができることが分かった。また、予習をして分からない部分があった児童は、そこを理解しようという目的意識をもちながら、しっかりと授業に取り組むことができていた。

V 成果と課題

1 実践の成果

「学習レポートを書く」というシンプルな学習を、半年間日常的に継続したことで、本学級の児童の学ぶ姿は大きく変わった。本学級の児童は、チャイムが鳴っても学習をやめない。レポートが書き終わるまで、教室の中は鉛筆が走る音しか聞こえないほど、集中して学習している。また、情意面の変化だけではなく、学習レポートの内容も変化している。4月の学習レポートと9月の学習レポートを比較すると、表6のよ

表6 4月と9月のレポートの変化

評価項目	4月	9月	変化
文字数が400字を超えている	35%	84%	+49%
両括型や尾括型、頭括型など、構成を整えて書くことができています	45%	78%	+33%
まとめ（自分の意見、学習レポートの結論）が書けている	34%	81%	+47%
図や絵、表などを用いて説明している	22%	78%	+56%

9月

速さの求め方

何分さんば、速さの表が次のようになっていて、いましな。今日は、その表について考えます。

はじめは、速さの求め方です。

速さを求めるには、このようにな式になります。

速さを求める公式は、 $速さ = \frac{道のり}{時間}$ と書うことができます。

次は、道のり(距離)の求め方です。

道のりを求める時は、速さ × 時間で道のりを求めることができます。

最後は、時間を求める場合です。

道のりを求める時は、速さ × 時間で道のりを求めることができます。

何分さんば、もし、かりと文章から読みとって、その中に合う式を当てはめていきます。

9月26日

題名：国会開設と大日本帝國憲法について

明治時代に行くと、国会開設と大日本帝國憲法ができました。今回は、国会開設の歴史と大日本帝國憲法についてまとめたいと思います。

1つ目は、大日本帝國憲法についてです。

下の表は、大日本帝國憲法をわかりました。そして、その内容を詳しく説明します。

大日本帝國憲法は、1889年に制定された。これは、日本が初めて制定した憲法である。この憲法は、天皇を国家の元首とし、天皇の統治権を制限する。また、国民の権利と義務を定める。この憲法は、日本の政治体制を大きく変えた。そして、日本が立憲君主制国家となった。

2つ目は、国会開設についてです。

国会開設は、「選挙」として行われ、国民が選挙権を持つことになった。これは、日本が初めて行われた選挙である。この選挙は、日本の政治体制を大きく変えた。そして、日本が立憲君主制国家となった。

このように、大日本帝國憲法と選挙(国会開設)ができました。これによって、日本の政治体制が大きく変わった。そして、日本が立憲君主制国家となった。

天皇中心の国で、日頃の生活

(教科書 p. 100)

写真8・9 9月に書かれた学習レポート

うな向上が見られた。

大きく伸びた項目が多く、「国語科で学んだことを他教科でも生かし、思考力・判断力・表現力を伸ばす」という当初の目標はある程度達成できたと言ってよいだろう。

本実践は、特別な道具や知識を使ったわけでもない。児童はただひたすら楽しみながら、学習レポートを書いた。教師が行ったことは、レポートを読みながら、その進歩を子どもたちと一緒に喜んでいただけである。日常的な場の設定によって行った実践であり、日本中のどこの小学校でも実施可能なものと言えるだろう。

子どもたちは半年間で一人平均100枚の学習レポートを書いた。それだけ書けたのは、表現することの楽しさを児童が感じていたと同時に、「表現する場があるからこそ、児童は思考・判断をするのだし、思考・判断をする場があるからこそ、表現することができる」という好循環が、児童の力を伸ばしたからである。「表現する活動と思考・判断する活動がつながったときに、児童の思考力・判断力・表現力が伸びる」ということが確かめられたことは、大きな実践上の成果である。そして、これらの活動を十分に行うための方策として、3つの場の設定は、非常に有効であったと実感している。特に「第2の場：学んだ書き方を活用する場」において、国語科の学習を他教科で積極的に生かすことが、表現力向上に絶大な効果があった。国語科の中だけでは、表現の仕方は学べても、それを活用する時間を確保することは無理である。総合的な学習の時間を使っても、半年間でレポート100枚分の活動は無理であろう。算数や社会と双方向的に関連付けたからこそ、大量のレポートを無理なく、楽しく書きながら、資料を調べる力や友達に問う力、図や表を用いて説明する力等を伸ばすことができたのだ。

2 今後の課題

今後は、表現技法や取材方法、推敲などについても繰り返し指導していきたいと考えている。

計画的・意図的な指導を行うために、児童の実態を把握しながら、それに応じた計画作成に取り組んでいきたい。その時、「書くこと」だけにとどまらず、「読むこと」や「話すこと・聞くこと」において培った力も他教科とつなげることで、より一層、思考力・判断力・表現力を向上させることができると予想される。また、「書くこと」と「読むこと」を結び付けて読書感想文や本の紹介文を書く活動などにも取り組んでいるので、今後はこれらの取り組みも、より一層充実させていきたい。

このように、「書くこと」以外の領域についても、他教科と双方向的に関連付けたり、国語科の中でもつながりを意識したりしながら計画作りを行っていくことが課題である。

また、本実践では、児童が書いた大量のレポートをどのように評価するかが課題となった。事前に予想していたことではあり、対策として児童による相互評価の場（第3の場）を設定したものの、今後はより効果的な評価方法についても、研究を進めていきたい。

〈参考文献〉

- ・小学校学習指導要領 解説 国語編（文部科学省）
- ・言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】（文部科学省）
- ・教科書－新しい国語 6上（東京書籍）
- ・教科書－新しい社会 6上（東京書籍）
- ・教科書－新しい算数 6上（東京書籍）